



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

山本周五郎「雨あがる」を読む：
日本語・日本文化研修留学生対象授業「文学から見た日本」の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学留学生センター 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): 山本周五郎「雨あがる」, 文学作品の利用, 原作と映画の比較 キーワード (En): 作成者: 土谷, 桃子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/22218

山本周五郎「雨あがる」を読む

—日本語・日本文化研修留学生対象授業「文学から見た日本」の試み—
Reading Japanese Literary Work "AME AGARU" by Shugoro YAMAMOTO
in Japanese Language and Culture Studies Course

土 谷 桃 子

要旨

日本語と日本文化を専門に学ぶために来日している留学生のための授業で、文学作品を教材とした授業を行なった。全部で3作品を選定して使用したが、本稿はその中の1つである山本周五郎「雨あがる」を用いた授業の実践報告である。「雨あがる」には、原作に忠実な映像作品があり、原作である小説と映像作品の比較を授業活動に取り入れることが可能であることから、教材として用いることとした。まず、授業の概要を述べ、次に授業活動の折に用いた内容理解質問と、最終筆記試験の学生の解答を手掛りに、学生がどのように作品を解釈・鑑賞したかを報告する。語学教育で文学作品を扱うことの難しさや、今回の授業で至らなかった点についても述べる。

キーワード：山本周五郎「雨あがる」 文学作品の利用 原作と映画の比較

- 目次：1. はじめに
2. 「文学から見た日本」概要
2-1. 受講生
2-2. 取り上げた作品
2-3. 授業スケジュール
3. 「雨あがる」の授業
3-1. 山本周五郎「雨あがる」
3-2. 授業方法
3-3. 解釈が困難だった部分
3-4. 最終試験から
4. おわりに

1. はじめに

本報告は、2006年度前学期（4月～7月）に岐阜大学留学生センターにおいて、日本語・日本文化研修留学生を対象として行なった授業科目「文学から見た日本」の実践報告である。タイトルにある通り「文学」をメインテキストとして用いる授業であり、取り上げる作品の選定から授業の準備や進め方、学期末の成績評価に至るまで試行錯誤を重ねた。しかし、いわゆる日本語の勉強から

一步離れて、自由に作品を解釈することが許される授業ならではの楽しさと発見のある授業であったと言える。

日本語学習者に対して文学作品を教材として用いた授業報告や教材研究については、先行の報告が既に備わり、(1) 本稿もそこに一例を加えたいと思う。先行報告で取り上げられているケースとの違いを挙げるとすれば、受講者が後述する日本語・日本文化研修留学生という特色ある学生であったことと、原作としての小説とそれが映像作品化された映画の両者を用いての授業であったことの2点が挙げられる。後者については十分な取り組みができなかった点を反省しているが、映像という刺激的な媒体を使うことによる効果は小さくなかったと考えている。

以下、受講生と授業の概要、授業内および最終筆記試験に表れた受講生の作品理解と鑑賞態度について述べていきたい。

2. 「文学から見た日本」概要

2-1. 受講生

「文学から見た日本」は、日本語・日本文化研修留学生（以下日研生と略す）のみを対象として本学留学生センターで開講された授業科目の1つである。岐阜大学は、大使館推薦によって、または大学推薦によって日本政府（文部科学省）奨学金を得た日研生のほか、受入れに余裕がある場合は私費で留学する学生も受け入れている。彼らは10月から9月までの1年間日本語と日本文化を学び、岐阜大学の場合、修了には授業単位の取得のほか8000字以上の修了論文の執筆と発表を課している。修了要件である論文執筆のことを考え、受入れの際の日本語能力は、日本語能力試験2級合格程度であることを条件としている。2005年10月から2006年9月までの岐阜大学留学生センターの日研生は6名で、出身国はカザフスタン（女性1名）、スウェーデン（男性2名）、タイ（女性1名）、中国（女性1名）、ブラジル（男性1名）であった。文部科学省奨学金を受給する日研生の応募者は、外国（日本国以外）の大学の学部に属している「日本語・日本文化に関する分野を専攻している者」（「2006年度日本政府〈文部科学省〉奨学金留学生募集要項 日本語・日本文化研修留学生」）と規定されており、岐阜大学では私費留学生の場合にも同様に規定している。自分の専門である日本語や日本文化を現地日本で学習する機会を得ることができた彼らが、強い学習動機と意欲を持つ学生たちであることは容易に想像できる。文学作品を教材として用いる際の懸念として、選んだ作品を好まない受講者が生じることが考えられるが、日本文化全般を意欲的に吸収しようとしている日研生には、その心配がないとは言わないまでも、かなり小さいと言えよう。取り上げる作品の選定には時間をかけ非常に苦労したが、受講者がその作品を拒絶するかどうかという点を気にせず作品を選べたことは有難かった。

2-2. 取り上げた作品

作品選定の際に心がけたのは、読んでいる最中は楽しく、読み終わったときには達成感を得られるものを選ぶことである。そして、日本や日本人独特の何かがにじみ出てくる作品が望ましい。更に、古典文学は無理だとしても、少し古い時代の作品に触れることも日研生に自信をつけるという点、他の日本語授業ではそれらに触れることが少ないという点で有意義だろうと考えた。熟慮の結果、江戸川乱歩「人間椅子」、8代目林屋正蔵演「あたま山」、山本周五郎「雨あがる」を選んだ。(2)

3作品を並べると何の脈絡もないように見えるが、それぞれを選ぶには筆者なりの理由づけがある。江戸川乱歩は日本の探偵小説の黎明期を支えた人物であり、現在も根強い人気を保っている作家である。一般的に授業教材には、新聞記事や新書など新鮮なものを用いがちだが、それとは逆に1925年に書かれた「人間椅子」を、少し古さを感じながら読むのも面白いだろうと考えた。江戸川乱歩が日本の文学史上で果たした役割、全編を手紙という形式で書いている工夫などに注意を向けつつ読み進めたが、「人間椅子」の持つ不気味な雰囲気や意外な結末に学生から様々な意見が出、乱歩作品の魅力が改めて感じた。江戸川乱歩がエドガー・アラン・ポーのもじりであること、現在でも乱歩作品を原作とするテレビドラマがあること、アニメ「名探偵コナン」の本名が江戸川コナンであることなど、学生をひきつける要素が豊富にあり扱いやすい作品であった。授業では文法項目を詳しく取り扱うことは意図的に避けたが、手紙文の中に敬語表現が頻出するため、図らずも敬語の復習をすることになった。

「あたま山」は、2つの小説の間に趣の異なるものを配置したいと考えて選んだ。学期初めの導入の授業で、「文学」に含んでいいものは何かというブレインストーミングを行なったのだが、文字で書き表された小説、詩はもちろんだが、演劇、落語、映画はどうだろうか、という問いが学生から自然に発生し、そこからのつながりで落語を持ってきたのである。また、この授業では是非映像作品も扱いたいと考えていたので、2003年度に第75回アカデミー賞短編アニメーション部門に日本人として始めてノミネートされ、世界各国での評価が高い山村浩二氏のアニメーション作品『頭山』が存在することも作品選定の大きな理由の1つであった。(3)「人間椅子」「雨あがる」はそれぞれ数週間かけて読んだのに対し、「あたま山」は1回の授業で読み、映画も同じ時間に視聴した。落語の音声資料も準備できれば3者の比較ができたのだが、そこまで準備が至らなかったのは教師の力不足である。映画を見る前に本文を音読し、江戸弁のリズムを楽しみ、演技力たっぷりに読む学生がクラスメイトの笑いを誘っていた。映画を見る前に、主人公が自分の頭の池に投身する最後の場面はどう映像で表現できるか、自分が映画を作るならどう描くかを学生に考えさせた。実際に映画を見た後、結末の描き方、現代風の味付けがされている部分について意見交換を行なった。映画視聴後のケアが不十分で、「見て面白かった」という程度で終わってしまったことは否めないが、本文・映画とも短時間で扱えるものなので、今後他の授業でも機会があれば使ってみたいと思う作品である。

なお、「雨あがる」については、3章で詳しく述べる。

2-3. 授業スケジュール

「文学から見た日本」は90分授業を毎週1回、15週行なった。全体の日程は以下の通りである。

授業回	授業内容
1～2回	文学とは・日本文学の歴史
3～5回	「人間椅子」読解
6回	筆記試験（「人間椅子」に関連して）
7回	「あたま山」読解・映画視聴

8～14回	「雨あがる」読解・映画視聴
15回	筆記試験（「雨あがる」に関連して）

導入の1～2回では、「文学」の範囲を広く考えれば演劇や映像も含まれるということを確認し、簡単な日本文学の歴史を講義した。まず、日本歴史の流れを大きく捉えるために、年号をカードにしたものを準備し、学生にそれらを古い順に並べさせるところから入った。来日前に日本歴史を勉強した学生がクラス全体をリードし、正しく並べることができた。次に、代表的な日本文学作品名をカードにしたものを見せ、どの時代の作品かを再度尋ねた。こちらの予想以上に作品名とその時代を知っている学生がいたのには感心した。その次の作業は少々趣を変え、日本の紙幣に描かれた肖像の変遷を辿った。学生の知らない人物がほとんどで、それぞれの人物について説明を加えたが、聖徳太子の肖像が多いことに学生は驚き、ごく最近まで政治家ばかりが取り上げられていたことに自然と気が付いたようであった。いわゆる文学者が紙幣に登場するのは1984年発行千円札の夏目漱石が最初であり、その後2004年発行五千円札の樋口一葉、また肖像ではないが源氏物語絵巻「鈴虫」巻が2000年発行二千円札に描かれたことを紹介し、紙幣に描かれるようになったということは、文学に対する認識の変化の現れではないかという私見を述べた。

文学史を詳しく扱うことはこの授業の眼目ではないので、時代区分を参考にしながら貴族の文学から武士の文学へ、更に庶民の文学へという大きな変遷を捉えることを旨とした。適宜学生の出身国について教師から問いかけ、また学生も不思議に思った点は積極的に尋ねてきたので、一方的な講義にはならず活発な授業となった。日本文学の導入の最後には、日本語自体も歴史とともに大きく変わっていることを実感してもらうために、万葉仮名で書かれた『万葉集』の短歌、『源氏物語』の冒頭部分、江戸時代の草双紙の挿絵と文章を紹介した。万葉仮名には当然のことながら中国の学生も首をかしげ、『源氏物語』の日本語については現代の日本語とはまるで別の言語のようだという感想が出た。草双紙は挿絵を見てどのような場面か推測させ、現代の漫画と似た楽しみ方ができることに気づいてもらった。学期開始前には、導入は授業1回で終わらせると予定していたが、教師の予想以上に学生は熱心で、質問や発言が相次いだため2回に延長した。日本文学を専門分野としながら留学生の日本語教育に従事する筆者にとって、これは嬉しい誤算であった。今後の可能性として、日本文学を留学生にわかりやすく紹介する講義も考えられるのではないかと考えている。

3回以降の授業では、本文資料を事前に配布し、授業範囲を読んでくることを予習として課した。「人間椅子」読解時には、授業時に内容理解質問のハンドアウトを配布して使用したが、ハンドアウトに記入する時間の無駄があるため、「雨あがる」読解時には内容理解質問も予習の宿題とした。「人間椅子」は教師が授業を主導したが、「雨あがる」は章ごとに担当する学生を指名し、演習形式で進めた。「あたま山」の扱いについては、2-2で既に述べた。

小説2作品それぞれの読了時には、理解度確認のための筆記試験を行なった。試験には、辞書・授業で使用した本文資料は持込可、配布した内容確認質問のハンドアウトは持込不可とした。質問項目は、学生の記憶力を問うようなものは排除し、本文を正確に読めているかを問うもの、粗筋の要約、意見述べなどの設問とした。

「雨あがる」の筆記試験及び映画視聴については、3章で後述する。

3. 「雨あがる」の授業

3-1. 山本周五郎「雨あがる」について

「雨あがる」は、山本周五郎（本名清水三十六、1903～1967）が1951年に『サンデー毎日涼風特別号』に発表した小説である。粗筋は以下の通りである。

主人公三沢伊兵衛は、剣や柔術の腕は立つが謙遜な気質と優しすぎるのが仇となり、職を得る機会を失ってばかりいる浪人者である。金銭的な苦勞をしながら、召抱えてくれる主を探す旅を、妻のおたよとともに続けている。ある木賃宿で雨に降り込められた伊兵衛夫婦は、同宿者が食べ物を巡って争う場に遭遇する。いたたまれなくなった伊兵衛は、妻に禁じられていた剣の賭け試合をし、それで得た金で宿の人々全員に酒や食事を振舞い、宿は賑やかな宴会となる。翌日、賭け試合をしたためおたよに顔向けができなくなった伊兵衛は逃げるように魚釣りに出かけるが、その途中で血気にはやる若侍たちの喧嘩を仲裁する羽目になる。その鮮やかな仲裁ぶりが、偶然その場にいた家老青山主膳の眼にとまり、主膳宅及び藩主永井家で御前試合をすることになる。首尾よく試合を終え、仕官はほぼ間違いがないという段階になって、同宿者のためにした賭け試合の件が明るみに出、仕官の話は取り消されてしまう。賭け試合をしたことを咎める藩主の使者に対し、以前は自らも賭け試合を許さなかったおたよは、何をしたかではなく、何のためにしたのかが大切なのだと言い切る。長く降り続いた雨も止み、伊兵衛夫婦は次の土地へと新たな気持ちで旅立っていった。

伊兵衛の仕官の話の主軸とし、そこに貧しくも気持ちは清らかな同宿者とのふれあい、妻おたよの心の動きが、巧みに織り込まれている小説である。本当の意味での悪人が登場せず、読後感が爽やかである。演劇化・テレビドラマ化の回数も多いが、2000年公開の黒澤明脚本・小泉堯史監督映画『雨あがる』（出演：寺尾聡、宮崎美子他）が記憶に新しい。小説の映像作品には、原作をかなり変化させたものや、複数の小説を取り込んで1つの作品にしたものがあるが、この小泉堯史監督作品『雨あがる』は、原作を比較的忠実に映像化している。そのため、この映画は、原作と映像化作品の両者を鑑賞・比較して授業に用いたいという筆者の意図に合致すると考えた。

本作を選んだもう1つの理由は、黒澤明監督が映画化を熱望し、脚本まで執筆したが志半ばで世を去ったことがある。「文学から見た日本」を実施した2006年前学期に先立つ2005年後学期に、筆者は同じ日研生に対して「映像から見た日本」という授業を行なったのだが、全15回の授業のうち2回で黒澤映画を題材として扱った。授業では、黒澤映画そのものを十分鑑賞することはできなかったが、部分的に視聴したり、黒澤監督が大監督と呼ばれるように至るまでの軌跡、彼の映画撮影のこだわりなどを、映像を見ながら学習した。学期がまたがるが、以前に学んだことと関連のある内容を題材とすることで、学習意欲が高まることを期待した。「雨あがる」開始前に、学生に前の学期に黒澤映画を扱ったことについて水を向けてみたが、監督のインパクトが強かったためか、学生はよく記憶しており、導入がスムーズにできたのは大きな利点であった。

文学作品を映像化したものの利用についていささか補足したい。現在、児童・生徒向けの日本文学紹介のためのアニメーションなどの視聴覚教材が各種販売・利用されており、それらが教材として有益であることは、筆者も賛同するところである。しかし、今回の授業に関しては、授業題目に謳われた「文学」が原作である小説と、原作に基づきつつも独自の小説解釈を映像化した映画の両者を指すと考え、単なる粗筋紹介のための映像ではなく、独立した作品として完成された映画を用いたいと考えた。但し、筆者は映画評論に詳しいわけでもなく、映像について専門に学んだわけで

もないので、これが最良の選定であったかについては自信を持って言い切ることはできない。

文学作品を日本語の教材とする際に、背景知識がなくても読むことが可能な現代小説を選ぶことが望ましいという考え方がある（岡本〈1999〉等）。筆者も、授業参加者の専門分野が多岐にわたる場合や、社会人や学生などが混在するクラスで用いる場合には、そのような作品を選ぶであろう。しかし、今回は日本語・日本文化を専門とし、日本歴史についてもある程度の知識を有する日研究生が対象であり、人数も6名と少ないことから何か問題が起きても丁寧に対処できるであろうと判断した。また、文章で理解が困難な部分（動作、住居施設、生活道具等）は、映像作品で補うこともできると考えた。授業を終えた段階で言えることは、歴史的内容を含む小説を教材としたことによる弊害は、今回に限ってはなかったということである。

3-2. 授業方法

まず、「雨あがる」授業開始当初に全体の本文をコピーしたものを配布した。漢字の旧字体をそのまま用いているものをメインテキストとして用いたので、難読と思われる漢字にはルビをつけた。「体」「軀」の漢字が併用されていたり、「劬（いたわ）る」など特殊な使用があったりしたが、そのような漢字には全てルビをつけたので、学生は負担を感じるというより漢字のバラエティーを知る機会となったようである。

「雨あがる」は全8章で構成されており、それぞれの章に対応した内容理解質問シートを作成し、翌週の授業で読解する部分の予習として課した。参考として、第1章に用いた内容理解質問シートの質問項目を以下に示す。

【第1章内容理解質問シート】

1. 「女」（p.325 1.1 他）は、なぜ怒ってわめいているのか。
2. 主人公三沢伊兵衛について答えなさい。
 - a) 独身か、既婚か。 b) 金持ちか、貧乏か。
3. 怒っている女について答えなさい。
 - a) 仕事は何か。 b) 同宿者とは仲が良いか。
 - c) 彼女は同宿者と比べて豊かか、貧乏か。
4. この宿にはどのような人が泊まっているか。
5. 伊兵衛は「襖を開けて」どこからどこへ「出ていった」（p.328 1.3）のか。また、なぜ「出ていった」のか。
6. 伊兵衛に話しかけると、その前とでは、女の話し方はどのように異なっているか。それはなぜだと思うか。
7. 伊兵衛とおたよは、どのような性格の人物だと思うか。自由に書きなさい。
8. 「自分の良心を守る」（p.329 1.11）について答えなさい。
 - a) 「自分の良心を守る」とはどのようなことか。
 - b) 伊兵衛は、この場面で良心を守ろうとしているのか、守るのをやめようとしているのか。
9. 第1章の中で、わからなかった語彙・文章を書き出しなさい

「雨あがる」は試験回を含めて8回で扱ったが、その詳細は以下の通りである。各回の授業では、

本文読解後、それにはほぼ該当する映画の部分を視聴し、文章だけではわからなかった点や、小説と映画とで変更がなされている点などについて確認・意見交換をした。(4) 但し、最終章である8章に該当する部分は、最終試験に映像を見て解答する設問を設けたため、読解授業時には視聴していない。

授業日	授業内容
6月5日	第1章(担当:教師)・映画視聴
6月12日	第2章(担当:学生A)・映画視聴
6月19日	第3章(担当:学生B)・映画視聴
6月26日	第4章(担当:学生C)・映画視聴
7月3日	第5章(担当:学生D)・第6章(担当:学生E)・映画視聴
7月10日	第7章(担当:学生F)・映画視聴
7月24日	第8章(担当:教師)・全体のまとめ
7月31日	筆記試験(含映画視聴)

第2章から第7章は、演習形式で発表担当の学生に授業の進行を任せた。内容理解質問シートが適当な指針となり、授業進行上特に大きな混乱は生じなかった。発表担当の学生には、事前に調べなくてもよい固有名詞や、特殊な語彙(剣道の構えに関する語など)を前もって示しておいた。演習時に理解できなかった部分や、全学生が誤解したまま通過してしまった部分は、適宜教師が解説・訂正を行なった。次節で、どのような部分に困難・誤解が生じたか、数例を挙げて述べる。

3-3. 解釈が困難だった部分

教師主導で読解を進めていく場合、教師の発想でどの部分を詳しく説明するか、どの部分を軽く扱うかが決められる。しかし、演習形式では、教師であれば問題ないと判断したであろう部分で、複数の学生が共通につまずいたり確認を要したりすることがあり、新たな発見があった。それらの例をいくつか紹介したいと思う。尚、本節と次節では、授業内及び最終試験での学生の発言・記述を引用するが、これらを本稿に使用することについては、受講生6名全員から口頭で了解を取っている。

「雨がふる」第2章に、伊兵衛が賭け試合で得た金で買った酒や飯で宴会になる場面があり、以下のような記述がある。

「まるで夢みてえだなあ」鏡研ぎの武平という男がつくづくと云った、「—こんなことが年に一遍、いや三年に一遍でもいい、こういう楽しみがあるとわかっていたら、たいてえな苦労はがまんしていけるんだがなあ」

そして溜息をつくのが、がやがや騒ぎのなかからぼつんと聞えた。伊兵衛はちょっと眼をつむり、それからどこかを刺されでもしたように、ぎゅっと眉をしかめながら酒を呷った。(下線筆者)

筆者は、下線部「溜息をつく」のは武平であることに何の疑問も持たなかったのだが、学生全員がそう解釈していなかったということがあった。内容理解質問シートで、「どこかを刺されでもしたように、ぎゅっと眉をしかめながら酒を呷った」伊兵衛の気持ちを問う設問があり、それに対し1人の学生が「奥さんに口に出して怒られたわけではないけれど、怒られたような気がしたから」と答えた。他の学生にも異存はなく、そのまま演習は進んだが、筆者にはどうもしっくりこなかったため、発表終了後に学生に確認してみた。その結果、学生は全員、溜息をついたのは妻のおたよだと理解していたことが判明した。おたよが賭け試合をした伊兵衛に対して怒りまたはあきらめの溜息をついたと解釈していたのである。おたよはこの宴会に出席しておらず、この場面では全く記述がないのだが、なぜ彼女が学生の頭に浮かんだのか。不思議に思い学生に尋ねたところ、「がやがや騒ぎのなかからぼつんと聞えた」が原因であることが判明した。「がやがや騒ぎ」はうるさい宴会の場所、「ぼつん」はそれに対して静かなところで小さく聞こえる音、ということから、宴会とは別室の小部屋で静かに1人座しているおたよが「ぼつん」と結びついてしまったのである。

この部分は、念のため最終試験でも問うてみた。その結果、武平と答えたのは6名中3名、おたよと答えたのが2名、伊兵衛と答えたのが1名であった。教師の思った以上にこの動作の主語の決定は難しかったのである。また、最終試験では、続く「がやがや騒ぎのなかからぼつんと聞えた」についても、どういう状況なのか説明を求めたのだが、溜息をついたのは伊兵衛だと答えた学生は「宿の人たちが話して騒いでいて、その騒ぎからたぶんドアの音がぼつんと聞えた。それはおろくが帰ってきた。」と答え、次の場面に登場する他の人物に絡めてしまっている。わずか数行の文章で、このような解釈のずれが生じたことが非常に興味深かった。(5)

もう1点、授業において学生が解釈に苦労した場面が第5章にあった。鮮やかな喧嘩の仲裁振りを目に止められた伊兵衛が、後日家老青山主膳宅に呼ばれ、浪人している事情を問われる場面である。

「無用な御謙遜は措いて、それだけのお腕前をもちながら浪人しておられるには、なにか仔細のあることと思うが、もし差支えなければお話し下さらぬか」

「それはもう、仔細というほどのことはなし、まるでお笑い草のようなものですが」

伊兵衛は身の上のあらましを話した。習慣として旧主家の名はそれとは云わない。ほのめかす程度で、相手も納得するわけであるが、彼の話しぶりの謙譲さが、内容の不明確さを補ったと見え、浪人した理由も、その後の任官がうまくいかなかったわけも、主膳にはおよそ理解がついたようであった。(下線筆者)

予習の内容理解質問シートに下線部の意味を尋ねる質問があったのだが、分からなかったため空欄にしていた学生が6名中3名いた。答えを考えてきた学生のうち2名は、それぞれ「彼の性格が恐縮、はずかしい(恐縮しやすく恥ずかしがる性格である)」、「丁寧な話し方でかえって内容がわかりにくくなった」と答えていた。学生主導の演習時には解釈がまとまらなかったため、教師の解説時に再度この部分に戻って確認した。1名が「彼の話し方で伊兵衛の性格がわかって、『あ、これが仕官できない理由だ』とわかった」と的確に理解できていたので、その学生の発言を引き出しつつ、この文の「内容」とは何の内容か、「不明確さを補った」とはどういうことか1つ1つ確認して一応の理解に達した。

この部分に関しても、最終試験でもう一度問うてみた。設問は「『彼の話しぶりの謙譲さが、内容の不明確さを補った』とはどういうことか」というものだったが、学生の解答は以下ようになった（学生の書いたまを転記する）。

- a. 伊兵衛は仕官できなかったことについて完全に話さなかったが、彼の話し方で青山は、伊兵衛は優しい性格を持っていることがわかったことによって、なぜ伊兵衛は仕官がうまくできないこともあきらかになってきた。
- b. 伊兵衛は自分がどうして仕事できないについてはっきり言わなかったが、藩主は彼の話や話し方から彼の性格が分かったから、彼の仕事できなかった理由が分かった。
- c. 伊兵衛は自分のことをはっきり話したくないように見え、彼が言ったことは微妙でした。
- d. いへいの話がていねいすぎて分かりにくかった。たとえば彼が本当に大した事をしたと言っても彼自身はそれを大したことのように言わない。
- e. 伊兵衛は自分の過去をかくしたいようだから、昔のことを話したくないことの代わり、謙譲さを入れた。
- f. はっきりと何とも言わないのに彼のていねいな話し方はそれをおぎなった。（当時の習慣によって、はっきりと話さなくてもよかった）

細部の誤りはあるが、a と b の 2 名の読みは正しいと判断できる。その他の 4 名は「内容の不明確さを補った」の理解が不十分である。授業で確認したつもりではあったが、完全には程遠い指導であったことを反省するばかりである。しかし、それだけこの部分が日本語学習者にとって難しいのだということも言える。

複数の学生から期せずして同じ疑問が発せられるということが、小説末尾近くまで読み進んだときに起きた。それは、第 7 章最後に登場する猿廻しの存在である。長く降り込められた雨が上がり、伊兵衛とおたよが泊まっている宿から、次々と人々が出立していく。それと入れ替わりに新しい宿泊客が訪れるが、その 1 人が猿を連れて猿廻しであった。彼が宿泊客相手に猿の芸を見せるという場面がある。授業がこの部分に差し掛かったとき、「なんでこの猿廻しがここで出てくるの」「いらぬよ、この猿廻し」という発言が自然と出てきた。本文の流れと何の関係もないではないかという。学生のこうした反応を踏まえて、最終章である第 8 章の内容理解質問の 1 つに「8 章最初に出てくる猿廻しの描写にはどのような効果があるか」という質問を設けた。第 8 章で猿廻しは、藩主からの使いを落ち着いた気持ちで待っている伊兵衛のそばで、突然太鼓をたたき「今日円満大吉でござい」と挨拶をして城下町に出て行く様子が描写されている。第 7 章読解時に、猿廻しはいらぬいと発言した学生たちが、どう考えてくるかに大いに興味をそそられた。しかし、大勢はやはり「いらぬ」という答えだった。少々無理をして考えてきた学生もおり、それぞれ「円満大吉ということばが吉兆」「パレードのようなお祝いの効果」「自分が気づかぬうちに猿廻しが近づいていたように、殿様からの使いも待っていれば来るという意味」と答えていたが、書いてきた本人も他の学生も今ひとつ納得がいかず、結局「猿廻しはいなくてもいい」ということになってしまった。

このような場面を授業でどう扱うかは非常に難しい。筆者自身は、この猿廻しは、長雨と、飲食をめぐる争いとそれに続く宴会という共通体験を通して既にできあがっていた 1 つの社会集団に、外部から飛び込んだ異分子の象徴という役割があると解釈している。最初は無料で猿廻しの芸を見

せて宿泊客を喜ばせ、その後見料を払えばもっと見せてやると言っただけに皆にそっぽを向かれる猿廻しは、食べ物に分け合って長雨をしのいできた人々からは遠い存在である。また、伊兵衛の仕官への熱い思いとこれまでの経緯を知らない猿廻しが、何の気なしに「今日円満大吉」と伊兵衛に告げてしまう滑稽さと皮肉さも、スパイスとして効いている。学生の中にも、自分たちが不要と考えた猿廻しが、映画でも省かれずにきちんと描かれていることに気がつき、「映画でも猿廻しがいる」と言っている者がいた。それをきっかけにもう一度猿廻しの存在意義を問うことも可能だったかもしれないが、上に記したような教師の解釈を講義することが果たして必要なのだろうかという疑問が生じ思いとどまった。この授業では文学作品を扱ったが、あくまでも日本語の授業であり、無理に文学解釈に深入りすることが必要か、どこまで教師が自分の解釈を語るべきか、迷いを感じたまま終えることとなってしまった。解釈を深めたい場合は、読解開始当初から登場人物に常に目配りしながら読み進めるよう指示するなど、より工夫が必要であろう。

本節では、学生が困難を感じた部分を取り上げたが、多くの部分では正確で新鮮な解釈を披露してくれた。例えば、仕官の話が実らず宿を発った伊兵衛夫婦だが、おたよは「軽い足どりで歩いていった」と書かれている。その理由は、「他人の押除けず他人の席を奪わず、貧しいけれど真実な方たちに混って、機会さえあればみんなに喜びや望みをお与えなさる、このままの貴方も御立派ですわ。」というおたよの気持ちの描写で明らかにされている。1名の学生はこの部分を自分なりにパラフレーズし、「おたよは、他人のために生きるのだという自分たちの生活の本当の意味がわかった」と述べた。賭け試合を全て否定していたおたよが、この宿での出来事を通して、他人の幸せのためにする賭け試合ならいいのではないかと考えを変え、自分たちの生きる意味を見出したというのである。多少大袈裟な感があることは否めないが、この小説の結末部分のおたよが、今までにないほど爽やかで明るい気持ちになっていることをよく読み取って表現していると感心した。

本節で取り上げた解釈困難な部分が、今学期のクラスのみの問題なのか、どのクラスで行なっても問題となるのかは不明である。機会があれば、再度この小説を教材に用いてみたい。

3-4. 最終試験から

既に前節で最終試験の学生の記述をいくつか引用したが、本節では最終試験問題中「雨あがる」全体にかかわる設問と、小説と映画の比較に関する設問に、学生がどう答えたかを中心に述べる。

まず、小説全体にかかわる設問として、以下の問を出題した。

「雨あがる」の登場人物（原作でも映画でもよい）から、伊兵衛・おたよ以外の1人を選び、その人物について論じなさい。内容は、人物分析でもよいし、その人物が作品に与えている効果でもよいし、そのほかの視点からでもよい。（下線ママ）

学生が選んだ登場人物は、非常に興味深いものとなった。学生6名のうち、説教節の爺さんを選んだ学生が1名、おろく2名、殿様1名、原田十兵衛2名となった。それぞれの人物について説明し、学生の解答を紹介したい。

説教節の爺さんとおろくは、伊兵衛夫婦と木賃宿で同宿する人物である。小説の冒頭部でおろくが爺さんに食料を盗まれる騒ぎが起きる。その騒ぎを見過ごせなかった伊兵衛が賭け試合をするということになるという、重要な役割を果たす2人の登場人物である。彼らは雨が止んで出立する場面で再

度登場し、伊兵衛夫妻に感謝の意を表す。小説冒頭部から登場しており、映画でも印象深く描かれているため、学生へのインパクトは強かったようである。以下長文になるが、説教節の爺さんとおろくを選んだ学生の解答を1名ずつ挙げる（学生の書いたまを転記する。以下同様）。

説教節のじいさんは作品では大切な役割を果たしていると思う。彼がおろくの飯を盗んだことから物語が展開したともいえると思う。そのことによって伊兵衛は約束をやぶり、かけ試合をした。説教節のじいさんを通して作者は貧乏な人たちを描いたと思う。彼は非常に貧乏で、病気で、食べ物さえない人だ。同情される人なので、伊兵衛は自分のためではなく、貧乏な人のためにかけ試合をした。そして彼がおたよに生まれてきて初めて幸せを感じたと言ったことによっておたよは自分の考え事を変えたと思う。彼女は人をよるこぼせる、たすけることは大事だと確信し、伊兵衛にかけ試合をしてもいいと言ったことは説教節のじいさんの言葉の影響を受けたに違いないと思う。つまり、原作での説教節のじいさんの存在はおたよと伊兵衛が貧乏な人をたすけるのは大事だとわかったことに直接な関係があると思う。

それでは、日かげの商売をしていた女性の人物について書きたいと思う。彼女が与えた効果は作品の終わりだけに見えるが、その効果が大事なことだと思われる。彼女は売春の仕事によって、ちゃんと生活できた。しかし、このようなたいへんな仕事によって、その女はかたくて、冷たくなった。売春の仕事はだれにも頼らない一人ぼっちの仕事だ。したがって、彼女は宿の同僚と仲よくなかったと思う。さらに、彼女はいいことしてもらったことないと思う。

しかし、宿に行なわれたパーティーのとき、彼女は伊兵衛に守られ、一緒に祝おうと誘われた。彼女はそのとき不器用なふうにならなくていいことしてもらった。彼女はそんなことを忘れずに感謝していた。そして、本の終りに、おたよにプレゼントを差しあげた。それは伊兵衛の努力が価値があるということを見せると思う。

この2人の学生は的確に登場人物を論じている。伊兵衛とおたよが貧しい人々に向けた思いやりが、それを受ける側、与える側双方にとってよい影響を及ぼしたことが述べられている。

殿様を選んだ1名は、原作と映画の描き方の違いに注目している。原作では名前と簡単な説明しかない藩主永井信濃守篤明を、生き生きと描かれた映画の殿様と比べている。

私は殿様について論じたい。なぜかというとその行動や性格などは原作と映画の中では違うところが多い。まず、彼の外見だ。原作には若い殿様だが、映画には少し年をとった人だ。なぜ映画は年をとった人にしたかというところが力持ち、偉いように見えるからだと私は思う。違ったところはそれだけではなく、映画の殿様は気が短く、おこりっぽい人である。それは映画を面白くする一つの目的だと思う。もし原作のように大人しく、冷静な殿様であれば、映画がつまなくなるかもしれない。ところで、映画の最後の部分で殿様が伊兵衛について考え方を変えたのは面白い。私の考えでは多分映画の監督が伝えたいことは上の人でも誰にも失敗がある。考え方を変え、やり直したりするのはいつでもいいという意味があるだろう。

この学生は、映画を面白くするために、殿様にコミカルな味付けをした点、教訓的な意味を持た

せるために結末部分を工夫した点に着目している。映画製作者の意図を自分なりに考察して述べている。

最後に原田十兵衛であるが、この人物を学生2名が選ぶとは予想していなかった。原田は前述のおろく、説教節の爺さん、殿様に比べると、小説の中で目立たない存在だからである。彼は原作の小説で、家老青山主膳宅で伊兵衛と剣術の試合をする人物の1人である。若くて血気盛んだが、伊兵衛にあつと言う間に負けてしまう。しかし、彼を選んだ学生の文章を読むと、なるほど原田は大切な人物だったのだなと逆に納得をさせられた。

原田十兵衛はこの話ではあまり出ない人物が、いへいが今まで闘ってきた相手をよく表しているだろう。若者でありかれは自分のうで前に明白に自信をもっている。そして恐らく多くの相手のように彼はいへいをみためではんだんし、なめてしまう。彼が笑わないようにがんばっていた所から、いへいをなめていた事がよくわかる。そして、また多くの相手のように十兵衛が負けた瞬間をあまりにも理解しなかったようだ。彼の失敗の直後にも十兵衛がずっとどうやって負けたかをなやんでいただろう。そしてその悔しさにうたれるのはそうとうの時間がたってからのことであつたと思う。

彼は大変大事な人物だと思う。十兵衛の立場と気持ちを理解すれば、多くの人をそのような気持ちにしたいへいがそこまであやまる訳もわかるだろう。

この学生が述べているように、原田は伊兵衛が今まで試合をして打ち負かしてした多くの相手たちを代表する人物と位置付けることができる。地味な原田を2名の学生が選んだ理由を別の側面から考えてみると、授業のときに伊兵衛と原田の試合を文章に基づいて実際に学生に身体を動かして演じてもらったことが考えられる。「原田青年はすっ飛んでいって道場の羽目板へ頭でもって突き当り、独りではね返って、ぶっ倒れて、だがすぐ半身を起こして、ちょっと考えて『まいった』と叫んだ。」という描写を、無理を承知で大笑いしながら演じたのが強く印象に残ったのではないだろうか。

次に、原作と映画の比較を問う設問であるが、原作最終章の第8章に該当する部分の映画を試験時に視聴し、以下の質問に答えるという出題をした。

「雨あがる」8章の映画を見て答えなさい。

- ① 8章部分の原作と映画の違いを説明しなさい。
- ② なぜ映画製作者はこのような原作との違いを作ったと考えられるか。
- ③ あなたはこの原作からの改変についてどう考えるか。

原作の第8章は、藩主からの使いが宿から去り、伊兵衛とおたよは次の国を目指して旅を続けるというところで終わっている。それに対して映画では、藩主が無為に戻ってきた使いを叱り飛ばし、伊兵衛を召抱えるために自ら馬を飛ばして伊兵衛夫婦を追いかける場面で終わる。上記①には、この点がわかるように書いてあれば可とし、全員が答えることができた。しかし、②と③に関しては、出題者の第8章に限って論じるという意図が伝わらず、映画全体についての漠然とした感想を述べた学生が多く、ポイントのずれた解答が発生してしまった。また、②・③は問うている内容が重なっており、学生に無用の混乱を生じさせてしまった嫌いもある。出題方法のまずさを反省している。

問題の意図を的確に理解した学生の③の解答例を挙げる。

原作からの改変は非常にすばらしいと思う。もし殿様は伊兵衛を追いかけなければ、伊兵衛のような立派な人が召抱えられなく、惜しく悲しく思うが、もし殿様は伊兵衛を引き留め一緒に帰れば、伊兵衛とおたよの憧れている貧しいながら、別の人を助ける幸せな生活もできなくなり、それも惜しいと思う。映画の最後に、殿様と伊兵衛が会ったかどうかは出なかったため、その部分の想像の空間を観客に与えた。映画としてすばらしい腕で、大成功だと思う。

殿様が伊兵衛たちに追いついたか追いつかなかったか、映画は明らかにしない。どちらの場合にしても残念なことはあると述べ、どちらになるかは観客の想像に任せる映画の余韻を評価している。本来ならば学生ともう一度映画を視聴し、最後の場面の意味を深めるべきだったが、時間その他の条件から試験で視聴させて終わってしまったことは悔やまれる。果たして殿様は追いついたか、追いつかなかったか、学生の考えを聞いてみたかったところである。

原作の小説と映像化された作品の比較を試みようとした授業ではあったが、最後の場面の扱いが中途半端になってしまったことを初め、効果的な比較ができたとは到底言えない。ただ漫然と映画を見せるだけでなく、ポイントを意識させるような工夫が必要であったかもしれない。例えば、映画の登場人物に関して、原作に全く表れない人物（例：藩主の妻）、原作とは異なる人格に描かれる人物（例：藩主）、原作に描かれたままとほぼ正確に再現した人物（例：おろく、猿廻し）という分類が可能である。それらの意味を考えながら映画を視聴するといった方法も可能であったろう。しかし、そう考える一方で、教師に指示された事柄を気にしながら映画を見るのが果たして良いのだろうかという疑問が頭をもたげる。あるいは、映画視聴の扱いも演習発表担当学生に任せてみるというのも面白いかもしれない。今回は初めての授業実施で問題点を見出すところまでで学期が終わってしまったが、まだまだ工夫の余地はあると強く感じている。

4. おわりに

「文学は教えることができるものなのか、教えるべきものなのか」という疑問は、国語教育の場でしばしば話題になっている（例えば、新しくは、日本文学協会第60回大会〈2005年11月〉大会テーマは「いま、〈文学〉をどう学ぶか？」であり、大会報告が特集された『日本文学』55巻3号〈2006年3月〉には、興味深い報告が並んでいる）。日本語教育の現場では、日本語を学ぶために読むという大前提があるため、文学作品の利用を深刻に悩むことはなく、むしろ日本文化を知るためにもっと積極的に活用してもいいのではないかという前向きな姿勢があるように感じられる。しかし、学生の解釈に不足や誤解があった場合、教師がどれだけ自分の意見を言っているのか、教師が面白いと思ったポイントを学生に押し付けているのか、という迷いは日本語教育の場で文学作品を扱っていても生じる。語学教育のスタンスと文学鑑賞のスタンスをどう取るか、両者のバランスをどうするかが、今回授業を行なってみて一番悩ましかったところである。これは、その時の授業にどのような受講生がいるかによっても加減をしなければならず、一概にどうするのがよいと言い切れない問題であろう。

映像作品の扱いをはじめ反省点の多い授業ではあったが、学生が自分の気づかなかった読みを他の学生から教えられて刺激し合うという行為がたびたび見られたのは、収穫であった。一例を挙げ

る。「雨あがる」第3章に、伊兵衛が守り本尊としている「石中に火あり、打たずんば出でず」という言葉が出てくる。この言葉が何を教えようとしているかを問うたところ、「何でもうまくいくいい点がある、どうすればそれが出てくるか」「難しいことは努力しなければできない」といった妥当な解釈が出て全員が納得した。しかし、学生の考察はそこで留まらず、この言葉は「危ないことがあるけれど、刺激しなければその危ないものは出てこない」という教訓としても使えるのではないかという発言が1名の学生からあった。このような解釈の可能性に気づかなかった他の学生は、クラスメイトの発言から新しい発見をしたのである。また、前節3-3.では多くの学生が共通して解釈に手間取った部分を取り上げたが、その他の多くの部分では、学生同士で説明しあうことにより、誤った解釈の訂正がなされており、教師が介入せずとも読解が進んでいたことを強調しておきたい。

今回の「雨あがる」の授業では、いわゆる語学学習から一步離れて楽しく読むこと、読了後に日本語で小説を読んだという達成感を持つこと、映像作品との比較で解釈の幅を感じることに、学生主導の授業を行なうこと、これらがある程度できたのではないかと感じている。今後の授業での「雨あがる」の利用の可能性を考えながら、教材として適当な他作品の探索も続けていきたい。

注

- (1) 近年発表された報告のうち管見に入ったものだけでも、池田（2003、2004、2006）、狩野（1999）、董・三上（2003）、三門（1995、2003）、吉田・山本（1994、1995）、等がある。
- (2) 学生に配布した本文資料コピーは、「人間椅子」は『ちくま文学の森4・変身ものがたり』（筑摩書房・1988）、「あたま山」は『ちくま文学の森5・おかしい話』（筑摩書房・1988）、「雨あがる」は『山本周五郎小説全集25・おたふく物語』（新潮社・1969）から取った。『ちくま文学の森』シリーズは、若年層を読者に想定しているため、振り仮名が多く留学生にとって負担が少ない。「雨あがる」は、拡大コピーしたものに筆者が適宜振り仮名を付した。
- (3) 山村作品アニメーション『頭山』の世界的な評価の一例として、世界の主要アニメーション映画祭でグランプリを受賞していることが挙げられる（第27回アヌシー国際アニメーション映画祭2003<フランス>、第16回ザグレブ国際アニメーション映画祭<クロアチア>、第10回広島国際アニメーションフェスティバル、レンコントレス国際アニメーション映画祭<ドイツ>等）。尚、授業ではDVD『Koji Yamamura Film Works』（パイオニア、2003）を用いた。
- (4) 授業で使用したDVD『雨あがる』（アスマック、2000）は、全体が13章に分割されている。小説と同一の区切りではないが、多少の調整を加えれば小説との併用が可能である。
- (5) 他の5学生は同設問にどのように答えたか、溜息をついた人物についての解答とともに下に列挙する（学生の書いたままを転記する）。
 - ▼みんな歌ったり踊ったりして大騒ぎで、楽しんでいるときに、武平は感心して溜息をついた。声が大騒ぎの中だから小さかったが、かえって読者の胸に大きく打たられると思う。（溜息の主語：武平）
 - ▼大騒ぎのなかでその音だけが非常に目立った。（溜息の主語：おたよ）
 - ▼周りの人々みんな騒いでいるのに（がやがや）その騒ぎを貫く音が聞こえてきた。（ぼつん）（溜息の主語：おたよ）
 - ▼そのがやがやが一瞬に沈黙になって、このあとすぐにまたにぎやかになったと思う。（溜息の主語：武平）

- ▼ 大ぜいの人がうるさく話し合い、騒いだりするなかからある人が他の人と違うことを言っている声を聞こえたということだ。(溜息の主語：武平)

参考文献

- 池田庸子 (2003) 「『学習者』から『読み手』へ—日本語教育における Extensive Reading の試み—」
『茨城大学留学生センター』1号
- 同 (2004) 「外国語教育における文学教材の役割」『茨城大学留学生センター』2号
- 同 (2006) 「上級日本語学習者のための読解教材—芥川龍之介「羅生門」教材化の観点—」
『茨城大学留学生センター』4号
- 岡本佐智子 (1998) 「上級文章表現授業への試み—リーディング：一冊の長編小説を主教材として—」
『日本語と日本語教育』26号
- 同 (1999) 「小説を主教材に使う—上級読解授業例—」『月刊日本語』1999年5月号
- 狩野不二夫 (1999) 「外国人に日本文学を教えることの意義」『留学生教育』4号
- 董英玉・三上勝夫 (2003) 「日本語学習者に対する文学作品の読み方指導の研究」『北海道教育大学
紀要 (教育科学編)』54巻1号
- 三門準 (1995) 「文学作品の教材化—宮沢賢治『注文の多い料理店』を例に—」『日本語教育研究』30号
- 同 (2003) 「視覚的手法を用いた文学教材の利用」『日本語教育研究』45号
- 吉田正信・山本雅子 (1994) 「日本語教材としての短編小説—樋口一葉『十三夜』教材化の観点と構
想—」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』18号
- 吉田正信・山本雅子 (1995) 「日本語教材としての短編小説—志賀直哉『城の崎にて』教材化の観点
と構想—」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』19号
- 「特集・日本文学協会第60回大会報告 テーマ いま、〈文学〉をどう学ぶか?」『日本文学』55巻
3号 (2006年3月)
- 「特集・文学教育の転回—読むとはどういうことか—」『日本文学』55巻8号 (2006年8月)